

「西川十万石（27,800m³）」と呼ばれる出荷量を誇りました。



あら 荒川を通じて木材を運ぶイカダ流し（飯能市）

いかだ 筏流しの歴史

飯能市（はんのう）の名栗地区、原市場地区などの入間川上流の村々では、山から切り出した木材を筏に組み、江戸（東京）に盛んに流送していました。

江戸幕府開府以降、町づくりや、度重なる江戸の大火の復興のために、江戸時代初期から木材を送っていたと言われていますが、それを示す資料は見つかっていません。現在見つかっている筏関係の文書は1713（正徳3）年のもの（狭山市・山崎忠男家文書）が最古で、この時点ですでに多くの筏が流されていたことがわかります。

また、こうして荒川を通じて江戸に運ばれていた材木は、「西川材」と呼ばれていました。

明治時代になっても筏流しはますます盛んで、その出荷量は「西川十万石（27,800m³）」と呼ばれていたそうです。

1915（大正4）年に武蔵野鉄道（現在の西武池袋線）が開通すると鉄道による木材輸送が始まり、また、道路が整備され、山方から飯能まではトラックで木材運搬が行われるようになり、これにともない筏流しは減少し、大正末から昭和初めごろを境に完全に姿を消したといわれています。



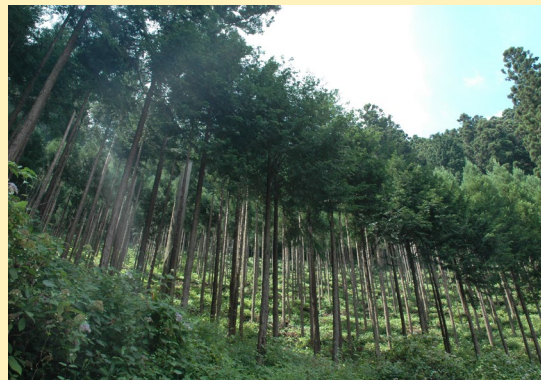
筏流し再現時の様子

▶ 西川材とは

西川材とは、埼玉県飯能市、入間郡毛呂山町、越生町から産出されているスギ、ヒノキの総称です。江戸時代から昭和初期まで、高麗川や越辺川、入間川、荒川、新河岸川及び隅田川を経て、東京・新木場まで流送された材木のこと、江戸よりも西の川あたりで生産されたという意味で「西川材」と呼ばれました。

時代に応じて、西川材は生産地域である荒川源流より東京新木場まで筏による流送や、大正時代に開通した鉄道輸送、自動車輸送により大量供給されました。

戦後から現代においても、西川材を用いた建造物は数知れず、地産地消の観点からも大変重要な埼玉県産品です。



西川林業地

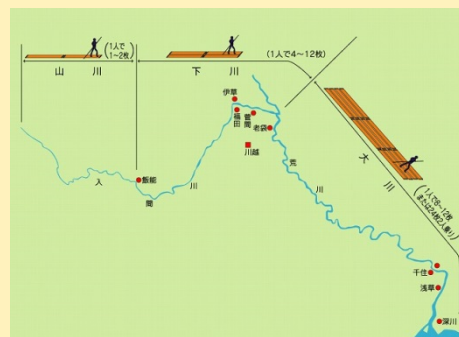
▶ 筏流しの経路

入間川上流の山々から切り出された材木は土場（材木の集積場所）に集められ、出水があり次第、筏に組まれて流されました。上流から飯能河原までを「山川」と呼び、1枚か2枚を1人で乗り下げました。

飯能河原から荒川との合流付近までを「下川（しもかわ）」と呼び、普通の水なら1日で行けますが、途中、用水堰などでトラブルや、水が干上がってしまったり何日も足止めをくうこともありました。

荒川本流を「大川」と呼び、途中で一泊し、下流に向かうと満潮時は潮を待ち、引き潮になると夜中でも筏を出して千住まで下りました。

こうして、名栗を出発して平水ならば5日目に千住に着いたといえます。



筏流しの経路図

コラム 筏流しの苦勞

のどかに川を下っている筏に見えますが、川の途中には自然の難所や障害物などがあり、流すには苦勞したようです。

名栗から飯能河原までの「山川（やまかわ）」は川幅が狭い上に岩やカーブも多く、流れも速いため、筏を操るのは大変難しく、危険も伴いました。竿1本だけで筏の進む方向を制御するため、熟練が必要でした。

竿さばきを誤ると岩に激突し、岩につかえて流せなくなってしまう。三百岩や吸い込み、堰など筏師が特に気をつけなければならない難所がいくつか言い伝えられています。先人の苦勞がうかがい知れます。



「三百岩」があったと言われている付近（飯能市小瀬戸）



「吸い込み」付近の川

アクセス

飯能市郷土館

交通：西武池袋線「飯能駅」下車、徒歩約20分

首都圏中央連絡自動車道狭山日高ICから車で約20分

住所：埼玉県飯能市飯能258番地の1



飯能市郷土館